

集中豪雨による災害について調べよう

季節：6月～9月 時間：4時間

集中豪雨による災害のようすを知ろう。

自分たちが住んでいる地域で、過去に発生した集中豪雨や大雨による災害について調べてみよう。

日本の他の地域で発生した、最近の集中豪雨や大雨による災害について、調べてみよう。

進め方

1. 写真をよく見て、集中豪雨時の災害のようすについてワークシートに書き出してみよう。
2. 手記をよく読んで、集中豪雨時の災害のようす、被災された人の心情や周囲の人々の援助のようすについてワークシートにまとめてみよう。
3. 市町村の災害報告書、災害時の新聞報道、あるいはインターネットなどを利用して、自分たちが住んでいる地域で過去に発生した集中豪雨や大雨による災害を調べてみよう。
4. 最近、日本各地で起きた集中豪雨や大雨による災害について調べてみよう。

写真1

(昭和58年、那賀郡三隅町)



7月23日午前7時58分ごろに、三隅川の水が土手を越して、街の中流れ込んできた。

写真2

(昭和58年、那賀郡三隅町)



7月23日午前8時30分ごろに土手が決壊し濁流によって家や樹木などが押し流された。

写真3

(昭和58年、那賀郡三隅町)



水がひいた後の写真1、写真2の地点のようす (7月23日午前11時30分ごろ)

写真4

(昭和58年、那賀郡三隅町)



水がひいた後、道路には二重三重に車や流木、家具などが折り重なっている。

写真5
(昭和58年、浜田市新町商店街付近)



浜田市街地でも広い地域で床下浸水した。浜田駅構内も浸水した。

写真7
(昭和47年・川本町)



濁流に洗われた川本町目抜通りの惨状。

写真6
(昭和58年、益田市あけぼの新町付近)



益田市内も川の土手から水があふれて市街地や国道9号線なども浸水した。

手記 ①

こうずい
洪水の後

三隅町湊下町 Aさん

水が引き、避難していた湊瀬戸町の車庫から恐る恐る家に近づいたとき、思わず息をのんだ。これが数時間前まで住んでいた我が家なのだろうか。

玄関のガラス戸と、道路に面した部屋の戸8枚が影も形もなく流され、古いだだ広い家はぽっかりと口を開けていた。

家の中は、流れ込んだ様々な漂流物である家具、建具、畳などが折り重なってどんでん返していた。

裏の川の水音がゴウゴウと激しく響く中で、荒れ放題の家の中は奇妙に静まりかえり、洪水の名残りの水があちこちでポトポト、ポトポトと音を立ててしたり落ちていた。

床上1.8メートル、ちょうど鴨居の真ん中あたりまでゴミがへばりつき浸水の跡を残していた。隣り近所どこを見ても家財道具などが天井近くまで重なり合い倒れ合って、おいそれとは家には入れそうにない状態だった。

これまで長崎や江川沿いの町々の水害の有様をテレビの画面の中で見て「大変

なもの」と感じていたのであるが、洪水がこれほど情け容赦もなく人々が築いた生活の基盤を覆すものであろうとは考えもおよばなかった。

水も電気も来ない、ガスも使えない暮らしの中で、復旧への毎日が始まったわけではあるが、不自由な苦しい生活のなかで今も強く心に残っていることは、地域の方々や知人、その他多くの方からいただいたご親切の数々である。

炊き出しのおにぎりがその日のうちに配られ、以後3週間にわたって続けられた。湊瀬戸町の方々のおかげである。

後で聞いた話であるが、他の地域では食べ物がなかなか行き渡らず、苦しい思いをされたり、被災者自身が交代で炊き出し当番をしなくてはならなかったということである。

復旧作業に専念できた私たちはほんとうに有り難いことであった。あの水害直後の、水のない中での大人数の炊き出しをするのは、どんなにか大変であったであろう。

泥と戦う人々の顔には不思議と被災者のしめっぽさは無く、意外なほどみんなたくましく明るかった。「被害を受けたのは自分だけじゃない。みんな一緒なん

だ。助け合い、いたわり合って復旧に努めなければ...」。そんな思いが日を追って人々の心の中に高まり、無い物を融通し合ったり、頂いた物を分け合ったりするなど、水害前には見られなかった近所の連帯感が強まっていった。

また、私たちを一層感激させ、勇気づけてくださったのは、直接被害を受けなかった方たちが、差し伸べてくださった力強い救援の手であった。細やかに行き届いた心遣いであった。衣食住の全てにわたってどれ程お世話になったことかとも言葉にはいい尽くせない。

災害から1年がすぎた今、なぜかあの水害そのものはとても遠い日の出来事のように思われるが、大勢の方たちから受けたご親切は温かいぬくもりとして身近に感じられるものである。

手記 2

感謝の心

三隅町三隅 Bさん

雨！それは私たち町民にとって、何にも増して一生忘れることのできないいやな言葉です。

7月23日の早朝、「早く避難せよ」という役場の無線放送で、弟の子供の手を引き、神社へと急ぎました。その時は、神社はまだたいした事もなく、山の水が石段を伝って社務所の方へ流れたりする程度でした。私たちは社務所の中におり、やれやれ一安心と子供達のリュックを降ろし、避難して来た人たちと大事にならなければよいがと話していました。

その時、近所のおばあさんは「(昭和)8年の水害の時は、ここが一番安全だったけのう」と、私たちに話してくださいましたので、少し気持ちが楽になりました。

外はバケツをひっくり返したような大雨でした。私はびっくりして、大声で「早くこっから出ないと拝殿に上がれなくなるから、みんな逃げよう」と叫びました。外に出てみると、もう山の水が滝のように社務所に向かって流れてお

り、それは水というより、泥水が流れ出ているようでした。必死の思いで子供達の手を引き、拝殿に上がってみると、たくさんの人たちが避難しておられ、その人たちの顔を見てもう大丈夫と思った拍子に、今まで張りつめていた力が急に抜けたようでした。

しかし、その安心も束の間、それから1時間くらい経ったでしょうか。上のお稲荷さんの山の方から何かパチパチと竹を割るような音がしたかと思うと、ゴーというすさまじい音とともに、山がふくれあがりました。それが二つに分かれてその間から水がふき上げパチーという音がしたかと思うと山が崩れ始めました。その時の光景は、現実とは違い、何か映画で見た場面そのままでした。

大人、子供たちの引きつった顔、悲鳴とも絶叫ともつかない声を出し、あっけにとられていました。我に返った時、山の土砂は社務所の方へ向かっているではありませんか。ああ良かった。逃げないであそこ(社務所)に居たら、今頃はきっとパニックが起こっていたに違いありません。あのままだら老人や子供たちの命はどうなっていたらろうかと思うと、身が震える思いでした。

そのうち、また大きな山崩れが起きました。今度は拝殿1メートル目前まで土砂がきたのです。その時には誰とも言わず、只々無言のうちに皆が合掌をしていました。「大丈夫、神仏がついていてくださるのだ。」と念じながら、一心不乱に合掌してお祈りしました。

幸い私たちの願いが通じたのか間もなく山崩れもおさまり、やがて山水も引き、雨が小降りになりました。その時には、思わず全員で万歳を叫び、今生きているという現実のすばらしさをひしひしと味わうことができました。

この水害の体験を忘れず、今後一生懸命、一日一日充実した人生を送りたいと思います。

ワーク

1 集中豪雨による災害が起きると、どのような状況になるのか調べてみよう

作業1 写真1～写真7は、集中豪雨による洪水や浸水、被害の状況を写したものです。また、手記1、手記2は三隅町在住の方が、豪雨災害後に、このときの出来事を書かれたものです。これらの写真、手記、新聞記事をもとにして、集中豪雨の時には、どのような状況になるのかまとめてみよう。

まとめ

写真や新聞報道から

手記から

作業2 自分たちが住んでいる地域や近隣の市町村で、過去に集中豪雨や大雨による大きな災害がなかったかどうか、家族の人や地域の人に聞いてまとめてみよう。災害発生の年月日がわかれば、図書館でその時のようすを新聞などを利用して調べてみよう。
(島根県立図書館や市町村の図書館には、過去の新聞が保存されています。)

災害の記録